

1 気象概況（6月後半：果樹研究所）

6月4～6半旬の平均気温は、4半旬が21.9℃で平年より1.4℃高く、5半旬が21.9℃で平年より1.6℃高く、6半旬が19.6℃で平年より1.3℃低い状況でした。この期間の降水量は39.0mmで平年の48%でした。

2 土壌の水分状況（6月30日現在）

果樹研究所における土壌水分（pF値：無かん水・草生栽培りんご園）は、深さ20cmは2.9で乾燥状態、深さ40cmと60cmは、それぞれ2.4と2.6でやや乾燥状態となっています。

3 生育状況（果樹研究所）

(1) もも

ア 果実肥大（7月1日現在）

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が46.9mmで平年比100%、側径が45.4mmで平年比101%、「ゆうぞら」は縦径が46.9mmで平年比102%、側径が41.4mmで平年比101%と、両品種共にほぼ平年並みの状況でした。

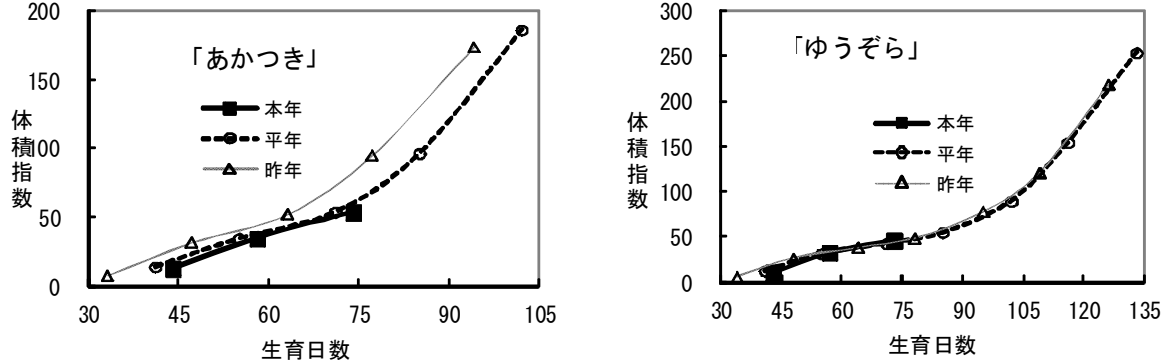


図1 ももの果実肥大

イ 新梢生長（満開後70日）

「あかつき」の新梢生長は、新梢長が12.3cmで平年比96%とやや短く、展葉数は13.6枚で平年比89%と少ない状況でした。また、葉色（SPAD値）は平年比104%とやや濃く、新梢停止は早い状況でした。

ウ 核障害の発生（満開後70日）

「あかつき」の核頂部亀裂の発生率は50%で平年並みで、縫合面の割裂は確認されず平年より少ない状況です。

エ 硬核期終了日と収穫期予測

「あかつき」の硬核期間は平年より短く、硬核期の終了は7月2日頃の見込みです。また、「あかつき」の収穫予測では、収穫開始は8月3日頃（平年より1日遅い）、収穫盛りは8月6日頃（平年並み）と予測されます。

表1 ももの発育予測（7月1日現在）

品 種	硬核開始日			収穫開始日			収穫盛日		
	本年	平年	平年差	本年予測	平年	平年差	本年予測	平年	平年差
あかつき	6月11日	6月11日	平年並	8月3日	8月2日	1日遅い	8月6日	8月6日	平年並み

注) 発育速度（DVR）モデルによる発育予測。平年は1981年～2010年の平均。

(2) なし

ア 果実肥大 (7月1日現在)

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が32.7mmで平年比104%、横径が40.3mmで平年比109%、「豊水」は縦径が33.4mmで平年比101%、横径が37.1mmで平年比106%と、両品種共に平年よりやや大きい状況です。

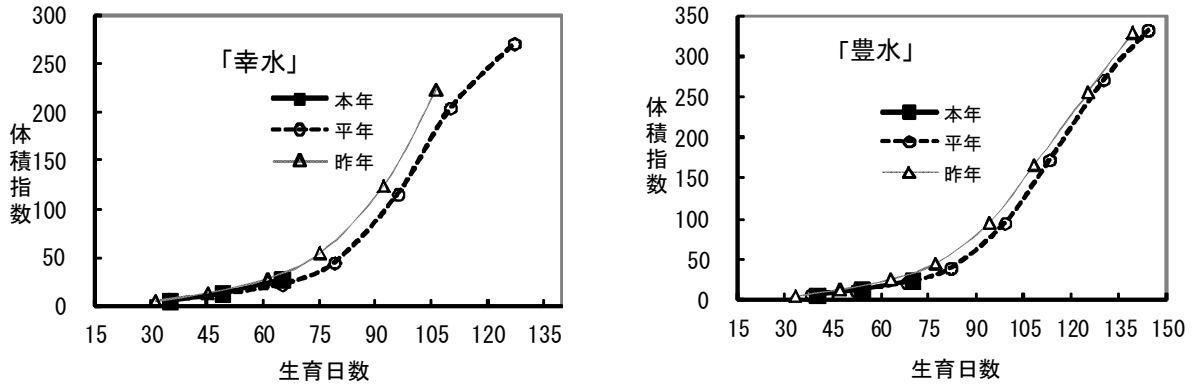


図2 なしの果実肥大

イ 着果状況

1回目の仕上げ摘果後の1樹あたり着果数は957果(49果/3.3m²)で、平年比127%の状況です。

ウ 新梢生長 (満開後60日)

「幸水」の予備枝新梢長は96.9cmで平年比98%、不定芽新梢長は89.0cmで平年比103%と、共にほぼ平年並みの状況です。

エ 生育予測

DVRモデルによる「幸水」の収穫予測では、収穫盛期が8月31日で平年より2日早いと予測されます。

(3) りんご

ア 果実肥大 (7月1日現在)

果実肥大を暦日で比較すると「つがる」は縦径が51.8mmで平年比106%、横径が58.5mmで平年比108%と平年より大きく、「ふじ」は縦径が43.5mmで平年比99%、横径が46.9mmで平年比101%と平年並みの状況です。

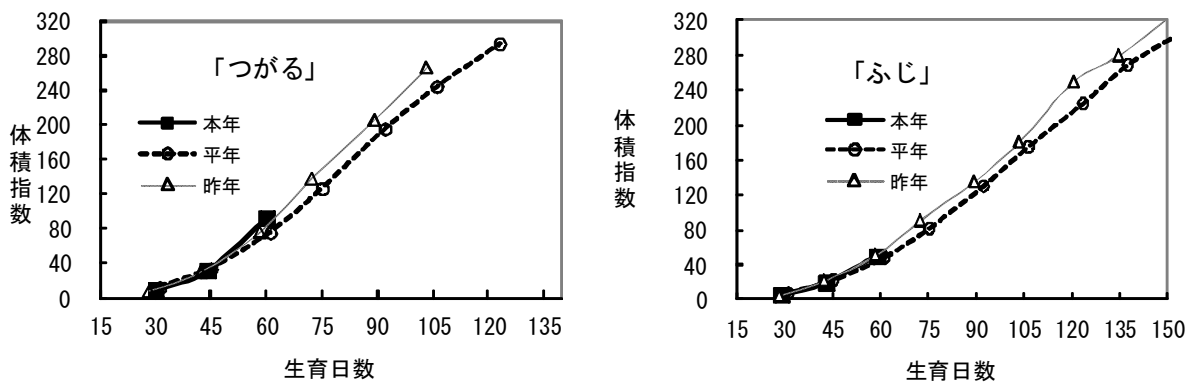


図3 りんごの果実肥大

イ 新梢生長 (満開後50日)

「ふじ」の新梢長は19.1cmで平年比100%と平年並み、新梢停止率は満開40日後で100%に達し、新梢停止時期は平年よりやや早い状況でした。

(4) ぶどう

ア 新梢生長（発芽後70日）

「巨峰」（有核栽培）の新梢長は、87.9cmで平年比108%とやや長く、展葉数は15.7枚で平年比105%とやや多い状況になっています。

4 栽培上の留意点

(1) 共通

今後、降水量が少なく土壌が乾燥するような場合は、以下の対策を実施してください。

ア かん水

夏期における果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度であるので、1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしてください。

ただし、ももでは収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやすいので、かん水が必要な場合は早めに実施しましょう。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう（草生園における地表面からの蒸発散量は、刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされます）。

ウ マルチ

刈り草や稲わら（暫定許容値(400Bq/kg)以下のもの）のマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

(2) もも

ア 早生品種の収穫

収穫前の降雨が多い場合や、核障害により胚に障害を受けた場合は、果肉の成熟が早まりやすく軟化が早い傾向があります。これらの場合は、収穫が遅れないように注意しましょう。

イ 修正摘果

硬核期が終了すると、肥大不良果や変形果などが目立ってきます。中生種の修正摘果は硬核期終了後、数回に分けて丁寧に実施しましょう。特に、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施しましょう。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」等の中生種は今月下旬頃から着色期に入ると考えられますが、収穫期予測等を参考に、夏季せん定、枝吊り・支柱立て、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に実施しましょう。

(3) なし

ア 新梢管理

果樹研究所内の「幸水」は、平均的に裂果初発日から3日程度遅れて新梢が停止（全体の95%の新梢伸長停止）となります。「幸水」で腋花芽着生向上を主な目的として新梢誘引を実施する場合は、新梢生育が旺盛な時期に実施すると効果的なので、裂果初発予想日（果樹研：7/13）の10日前頃がピークとなるように予備枝誘引作業を進めましょう。

また、新梢誘引は腋花芽着生向上の他、樹体の受光条件向上、薬剤散布の効率化、翌春における長果枝棚付け作業の効率化などの効果も期待できるので「幸水」以外の品種でも積極的に実施しましょう。

イ 着果管理

仕上げ摘果は速やかに終了しましょう。着果過多にならないよう、単位面積あたりの着果量を確認しながら作業を進めましょう。なお、裂果が観察される時期の摘果は、他の果実の裂果発生を助長するおそれがあるので控えましょう。

(4) りんご

ア 着果管理

満開60日後（7月上旬）まで仕上げ摘果を終了しましょう。7月は花芽分化期に入るため、仕上げ摘果が遅れると花芽分化率が低下する原因となります。

仕上げ摘果終了後は、随時修正摘果を実施し、小玉果や変形果、病虫害の被害果、傷果、サビ果等を摘果しましょう。

イ 枝吊り・支柱立て

果実肥大にともない枝が下垂すると、樹冠内部や下部の日当たりが悪化し、果実の着色不良等の原因となります。樹冠内部の日当たり改善と枝折れ防止のため、枝吊り・支柱立てを実施しましょう。

ウ その他

降水量が多くなると、湿害の危険性が高まります。土壌の過湿は、葉の褐変や黄変落葉を引き起こす原因となるので、停滞水が発生しやすい園地では排水対策を徹底しましょう。

(5) ぶどう

ア 着房数管理

着房過多は、糖度上昇の遅れ、赤熟れ果等の要因となりますので、ベレーゾン（水回り）期までに着房数の見直しを行いましょう。

最終着房数の目安は「巨峰」では3.3m² 当たり9～10房、「高尾」では10～11房とします。1新梢当たり1果房とし、弱い新梢には着房させないようにしましょう。

イ 摘粒及び袋かけ

摘粒は、「巨峰」は一房当たり30～35粒、「高尾」は40～50粒を目安に残しましょう。作業時期が遅れると、果粒同士が密着状態となり、ハサミが入りにくくなり、果皮を傷つけ裂果や病害発生の原因となるほか、作業性も低下するので早めに行いましょう。

また、収穫後の脱粒を防ぐため、密着した円筒形の房型に整形し、無核果や障害果、内側に入り込んだ果粒、飛び出している果粒を中心に取り除きましょう。なお、この時期以降、果房に触れると果粉（ブルーム）が落ちるため、摘粒の際は穂軸を持って作業し、果房を直接手で触らないようにしましょう。

摘粒終了後は、速やかに防除を行い袋かけを実施しましょう。

袋かけでは、袋内温度が急に上昇すると日焼け果発生が助長されるので、日中の気温が30℃以上となる条件下では袋かけを行わないようにしましょう。袋かけと同時にかさかけを行うと日焼け防止に有効です。また、ベレーゾン（水回り）期以降は、日焼けの発生が比較的少なくなるので、7月上旬頃まで袋かけが終了できなかった場合は、ベレーゾン期となる7月下旬以降に袋かけを実施するのも有効です。

ウ かん水

ベレーゾン期に干ばつ傾向が続く場合はかん水を実施しましょう。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア りんご輪紋病、褐斑病、斑点落葉病

輪紋病については、果実、枝梢部ともに感受性が高い時期となります。また、降雨日が多くなると褐斑病、斑点落葉病の発生にも注意が必要です。7月上旬にいずれの病害にも効果がある薬剤を十分量散布しましょう。

イ ももせん孔細菌病

被害葉、被害果実は二次感染源となるため、見つけしだいせん除して適切に処分しましょう。薬剤防除を行う場合は、収穫前日数に十分注意しましょう。

ウ もも灰星病・ホモプシス腐敗病

早生種では灰星病の重要防除時期にあたるので、7月上旬および中旬に灰星病防除剤を散布しましょう。中～晩生種では灰星病とホモプシス腐敗病の同時防除が必要となるので、7月10日頃にいずれの病害にも効果がある薬剤を散布しましょう。

エ なし黒星病・輪紋病

浜通り地域では、平年より発生量がやや多い状況にあるため注意が必要です（病虫害防除所による6月28日付防除情報）。7月上旬、中旬に7～10日間隔で黒星病、輪紋病に効果がある殺菌剤を十分量散布するとともに、黒星病の罹病部位は見つけしだい取り除きましょう。

また、輪紋病の重点防除期にもあたるため、多発が予想される場合は梅雨明けまで7日間

隔で防除を行いましょう。
オ ぶどう晩腐病・べと病
袋かけは、防除を実施した後、速やかに行いましょう。

(2) 虫 害

ア 主要鱗翅目害虫

現在の主要鱗翅目害虫の発生時期は平年並に推移しています。フェロモントラップ調査による発生消長などを参考に防除適期を逃さないようにしましょう。

イ ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第2世代の防除適期は7月1半旬頃と推定されます。まだ防除を実施していない場合には速やかに実施しましょう。本種はもも等の核果類の新梢伸長が停止するとなし果実への寄生が増加します。また、高温年は交信かく乱剤のフェロモン成分が急激に揮発するため、7月下旬頃から交信かく乱効果が低下することがあります。例年、なしの果実被害が多い地域では、今回の世代から防除を徹底しましょう。

ウ モモノゴマダラノメイガ

本種の誘殺は7月上～中旬に一旦少なくなった後、7月5半旬頃から再び増加します。被害が予想されるもも園では、7月2半旬頃まで防除を継続しましょう。被害果実は見つけしだい摘除して5日以上水漬けするか、土中深く埋めましょう。

エ モモハモグリガ

モモハモグリガの第3世代の防除適期は7月2半旬頃と推定されます。本種の発生には無防除のハナモモ園や放任園などが影響していると考えられるため、無防除園の管理や放任園の伐採等を行いましょう。

オ ハダニ類

高温が続く場合はハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当り雌成虫1頭以上）の密度になったら速やかに防除を行いましょう。

表2 主要鱗翅目害虫の防除時期の推定（果樹研究所 平成25年7月1日現在）

今後の気温 予測	ナシヒメシンクイ		モモハモグリガ	
	第1世代 成虫盛期	第2世代 防除適期	第2世代 成虫盛期	第3世代 防除適期
2℃高い	6月20日	6月29日	7月2日	7月7日
平年並み	6月21日	7月1日	7月3日	7月8日
2℃低い	6月23日	7月3日	7月3日	7月9日

注) 演算方法は、三角法による。

起算日：ナシヒメシンクイ 4月30日、モモハモグリガ 6月9日

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

<http://www.pref.fukushima.jp/fappi/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 技術革新支援担当 TEL 024(521)7339
(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL：http://www.cns.pref.fukushima.jp/pcp_portal/PortalServlet?DISPLAY_ID=DIRECT&NEXT_DISPLAY_ID=U000004&CONTENTS_ID=22752#gi_jyutsu_jyouchou

ふくしま新発売：以下のURLより最新の農林水産物モニタリング情報、イベント情報等をご覧ください。

URL：<http://www.new-fukushima.jp/>